

寝起

ねお

作・山口大器

登場人物

アサ 女 カブトムシを飼っている。
ノボル 男 アサの恋人。
ヒカリ 女 ノボルの妹。
ソヨギ 男 アサの友人。

そこは、どっちら女性の部屋の二室がある(しかし物語のある場所はその部屋には限らない)。
どこからか、秋のある日の音が聞こえてきて、

1・カブトムシ

そこに、1組の男女がいる。二人は恋人である。

ノボル 生まれ変われるとしたら、
アサ うん。
ノボル カブトムシになりたいんだよね。
アサ カブトムシ？
ノボル そう。カブトムシ。
アサ カブトムシ??
ノボル だからそうだって。
アサ なんて。
ノボル かつこいいじゃん。カブトムシ。
アサ まあ、かつこいいけど。
ノボル 好きなんだよねー。
アサ え、でも……かつこいいの後半だけじゃん。
ノボル え。
アサ いや、前半。幼虫時代。キモくね？
ノボル あー、まあ。確かに。
アサ でしょ。白くて、こう、ちょっと毛が生えてて、うわ、想像しただけで無理。
ノボル やめてくれよ、おれの来世を気持ち悪がるの。
アサ いや、来世で。
ノボル まあ、確かに気持ち悪いけど、まあ、ほぼ土の中いるし。
アサ いや、でも土食ってるんだよ？
ノボル それは、そういう生き物なんだから。いいじゃん。ってか、考えてみ。人生の前半は、土の中

アサ
で好きなもん食って、寝て、起きて、また食って寝て、起きて。最高じゃん。幼虫。
いやでも、

ノボル
しかもしかもかも、
アサ
何。

ノボル
しかもよ、成虫になったら、かっこいい、そして、もう蜜だけ吸ってる。蜜吸って、あとは、
雌と交尾だけする。

アサ
まあ、成虫はね。そっちはいいかもしれないけど。ってかノボルくん喧嘩弱いじゃん。蜜吸えないよ。負けちゃうよ、他のカブトムシに。

ノボル
いや喧嘩弱いって言うけど、人間の中ででしょ。カブトムシの中なら、ダントツだと思うんだよね。喧嘩。

アサ
あんたもカブトムシなんですよ。だったら負けるって。絶対。

ノボル
いや。大丈夫だと思う。幼虫時代にしっかり食ってしっかり寝るから。デカくて、つよいカブトムシになるわ。

アサ
ってか、サナギになるんじゃない、そんなときどうするの。

ノボル
そんなの決まってるじゃん、寝る。

アサ
いや、寝るって。

ノボル
他にすることないじゃん。それこそ。

アサ
ご飯も食べれないんだよ。暇じゃん。

ノボル
ひまなー。ひまだわ、確かに。

アサ
でしょ？

ノボル
うん。でも、まあ、仕方ないなあ。それは、成虫になるための、なんつーか、下積み時代だから。

アサ
うーん。

ノボル
ね、なる、カブトムシ。

アサ
いやいや、私はならないから。カブトムシ。勝手になってください。

ノボル
一緒になるうよー、カブトムシ。言ったじゃん、来世もまた出会うわって。

アサ
まあ、いったけど。そういう意味じゃないから。何て言うか、人間として、前提が。人間として、またノボルくんと出たいっていう。でしょ？だって、カブトムシの雌として、出会うとは思ってないもん。ノボルくんも、いやでしょ？

ノボル
俺がカブトムシなら、一緒にカブトムシになってくれた方がいい。

アサ
いや、ないわー。むりむり。

ノボル
まあ、まだわかんないから。ちょっと考えといて。

アサ
いやだよ、断固拒否。

ノボル
別に、明日死ぬわけじゃないしさ、ちょっと考えてみて。お願い。

「カブトムシの成虫は、幼虫の頃に比べて、体が大きくなる。でも、幼虫の頃に比べて、寿命は短くなる。だから、幼虫の頃にたくさん食べて、エネルギーをためておく必要がある。」

アサ 寝起(ねお)。

と、音楽が流れ、物語は始まる。

2・ドロドロ

前のシーンから約3年がたったある日。3人の男女がいる。

アサの部屋に、ヒカリとソヨギが集まっているのだ。

ヒカリは深く深呼吸をしており、

他の二人は誰ともなく会話の糸口を探っている。

ヒカリ サナギの中身って何か知ってますか？

ソヨギ え……？サナギ？

ヒカリ そう、サナギ。

ソヨギ え、中身って、虫なんじゃないの。虫がこっ(前屈みになる)やって、寝てるんじゃないの。

ヒカリ 違うんです。

ソヨギ え、違うの。

ヒカリ アサさん知ってますか？

アサ え。あー、わかんない。

ヒカリ ドロドロの液体なんですよ。

ソヨギ え。

ヒカリ え、って感じでしょ。元々幼虫がこっ(こ)やって、変体していくのかと思ったら、一回、ドロドロと溶けちゃって、そこからこっ(こ)、成虫になるんです。

ソヨギ 変体？

ヒカリ ああ、昆虫がそうやって形が変わることを変体って言ってます。蝶々とか蛾とか、あ、カブトムシとかもなんですけど、幼虫と成虫とで形が全く変わるものを完全変体、逆にバッタとかカマキリとかそのままの形で生まれてそのまま成長していくものを不完全変体って言ってるから、一回サナギになる虫は完全変体ですね。それで、すごくないですか、

ソヨギ あ、そうだね、えっと、何が。

ヒカリ だから、そういう、生態系？変体が。

ソヨギ あ、そうだねー、ま、何て言うか、変態だねえ。

ヒカリ そうなんですよ、変体なんですよ。神秘じゃないですか。眠っている間に、グジャって、ドロドロに溶けて、成虫になるの。

アサ サナギ好きなの？

ヒカリ いや、サナギ、とかじゃないんですよ。生物、生態系の全てが。まじ、愛、って感じじゃない

ですか。愛。もう、愛ですよ、愛。そこにいて、動いている。尊い。いや、冷静に考えてみてください。ただのタンパク質とかキッチンとか脂質とか、そう言ったものなのに、動くんですよ。これもう、特撮の世界観ですよ。宇宙人ですよ。宇宙人。神秘だなあと思ってなるほどねえ。

アサ あー。

ヒカリ まあ、昆虫に限ったことじゃないんですけどね。いや、なんでこんな話するかって言うんですけど、全然悪い意味じゃないんですけど、あ、言ってもいいですか。

アサ あ、私？

ヒカリ はい。

アサ え、何を言うの。

ヒカリ ああ、えっと、いっちゃうと失礼かもしれないんですけど、大丈夫ですかね。

アサ その内容によるけど、言ってみて。

ソヨギ おれ、耳塞ごうか。

アサ いいよ、大丈夫。

ヒカリ この部屋、すっごく、腐葉土の匂いしません？

アサ え。

ソヨギ 腐葉土？

ヒカリ いや、もう私、実家がすごい田舎で、なんかもう、その時の、大地の香り、みたいなのに包まれている感じがすごい良くて。いや、もう、ゾトックスというか。

ソヨギ 腐葉土って？何。

ヒカリ あ、腐葉土ってのは、落ち葉とかが腐った土のことで、あ、カブトムシの幼虫の餌とかになるんですけど、落ち葉が溜まって微生物によって分解されて、発酵して、そのときの匂いが。あ、これ本当に悪い意味じゃなくって。

ソヨギ え、それって土が腐った匂いがしてるってことだよな。

ヒカリ あ、葉っぱです。

ソヨギ 葉っぱか。あ、いや、どっちでもよくって。いや、それは、全然、そんなことないけど。全然気にならないし。

アサ そうかな、匂いする？ごめんね。

ヒカリ いや、全然、もう、だからむしろ、褒めてるって言うか。

ソヨギ 褒めてるの？

ヒカリ 褒めてますよー。なんか、そういう消臭力のなやつ、あるんですか？

アサ いや、ないけど。

ソヨギ おれは、全然、気にならないから。

ヒカリ そう、だから、不意に、語りたくなっちゃったっていうか。

アサ サナギについて？

ヒカリ そう、サナギについて。

アサ ああ、なるほどね。

ソヨギ アサちゃんがいならいいんだけど、それ、結構失礼よりの発言じゃない？

ヒカリ やっぱりそうですかね。

ソヨギ うん、昆虫的には褒め言葉でも、人間的にはアウトじゃないかな。まあ、いいなら、いいんだけど。

と、舞台奥の方で、カタン、と音がする。

アサ あ、ちょっと待ってて。

ソヨギ どうしたの。

アサ 起きたみたい。

ソヨギ ん？起きた？？

アサ うん、彼。

ソヨギ ん？彼？？

アサ うん。ごめん。連れてくるね。

ソヨギ え、あ、そうなんだ。……夜型なんだね。

と、アサは部屋を出ていく。

ソヨギ 彼氏いるんだ。

ヒカリ ……まあ、ずっと引きずってても仕方ないですし。

ソヨギ そうだね。

ヒカリ 次のステップですよ。その方がお兄ちゃんも喜びます。きっと。

ソヨギ ヒカリちゃんはいいの。ってか知ってたの？

ヒカリ いいえ。でも私は、最初から、そのつもりでしたから。

ソヨギ ……もうこない方がいいのかな。

ヒカリ なんて？

ソヨギ 次のステップ。お互い。

ヒカリ ソヨギさん……まだ好きだったんですか？

ソヨギ え。

ヒカリ ……残念でしたね。

3・変身

と、アサが戻ってくる。
手には田かきがめる。

アサ お待たせ。ごめんね。突然。びっくりさせちゃうと思うんだけど、二人には聞いてもらってた方がいかなと思うって。

ソヨギ あれ、彼氏は。

アサ ああ、うん。(虫かごを探りながら) おーい。ヒカリちゃんとソヨギくんが来てるよ。

ソヨギ アサちゃん？

アサ (虫かごのカブトムシを見せて) あ、ノボルくん。

ソヨギ ん？あ、名前？

アサ まあ、名前っていうか、ノボルくん。

ヒカリ 彼氏さんは？

アサ ノボルくんだよ。

ソヨギ どういうこと？

アサ まあ、厳密には三世目だから、ノボル改、だけど、まあ、中身はノボルくんだから。

ヒカリ 3世代目？

アサ そう。あ、ちょっと待ってて。

と、アサは再び部屋を出て行き、

ソヨギとヒカリは「ノボル改」を見つめている。

ヒカリ おっきい……。

ソヨギ ああ、うん。

二人 カブトムシ。

と、アサが戻ってくる。

手には小さな箱がある。

アサ こっちが、去年のノボル超(スーパー)で、こっちが普通のノボルくん。無印だね。

ソヨギ ドラゴンボールみたい。

ヒカリ え。

アサ 変な風に思わないでほしい。もう人間の姿じゃなくなったけど、これが、今のノボルくん。ほら、妹と友達が遊びに来てくれてるよ。(カブトムシを見て) 喜んでるみたい。寝起だから、ボーツしてるけど。

ソヨギ ずっと、飼ってたの？

アサ 飼ってた、っていうか、暮らしてた、ね。いや、本当はもっと早く言いたかったんだけど、ほら、まだ受け入れきれなかったみたいだったし。急にこんなこと言われても困るかなって。

ソヨギ ……。

アサ いや、わかる。わかるよ。私も最初はありえないと思った。そんなはずはない、ノボルくんは死んだんだって。実際お葬式だってあったし。でもね、生まれ変わって会いに来てくれた。すごくない？一周忌のちょっと前、うちに帰ってきたときに、ベランダの、そのところに一匹のカブトムシがとまって、あ、そうか、ノボルくんが会いに来てくれたんだ、って思ったの。ほら、亡くなったのが秋ごろだったじゃん。だから、ちょうど、こう、それから幼虫生まれて、成虫になって、っていうタイミングじゃん。そこでやっと会いにこれたんだ、と思って。それが、このノボルくんね。で、そこから雌を探して、交尾させて、生まれたのが、このノボル超（スーパー）。で、第3世代。

ソヨギ えっと、生まれ変わってこと？

アサ まあ、そういうことかな。

ヒカリ お兄ちゃん……。

ソヨギ 受け入れたの？

ヒカリ 愛ですね。

ソヨギ っていうか、それ、孫になるんじゃないの。ノボルの。ま、ノボルのっていうか。初代の。

アサ まあ、確かに、その葛藤もあった。でも、ほら、一年周期で新しい世代に変わっていくじゃん、だから、うまいことバトタッチして、ノボル改。そう解釈してる。

ソヨギ ああ……。えっと、

ヒカリ 確かに、昔から、好きでしたから。お兄ちゃん。カブトムシ。(涙を堪える)

ソヨギ 泣いてるの。

アサ わかるよ……。(肩をさする)。

ソヨギ 愛……かなあ。

と、音楽が流れ出して、場面が変わる。

4・ラジオ体操

ノボル おはようございます。ラジオ体操の時間です。今日も一日、元気に頑張りましょう！

アサが起きてくる。ラジオセをカチッと鳴らして、音楽を鳴らす。

ラジオセからはラジオ体操第一の軽快な音楽。アサとノボル（ノボル改）の毎日がそこにある。

ラジオ体操第一の動きをトレースするように、二人の日常が進んでいく。

ノボル 伸びをして寝起きの運動

寝起き。アサが目覚め、伸びをこなしている。

アサ (伸びをして) ラーン、ノボル、おはよう。

ノボル 腕を振って歯磨き洗顔の運動

歯磨き、洗顔、など、朝の支度をしている。

アサ (腕を横に動かし歯を磨く)

ノボル 腕を回し洗濯物を干す運動

洗濯ものを干すなど、している。

アサ (左右に洗濯物を振りながら、干す)

ノボル 胸を反らして昆虫ゼリーを替える運動

カフトムゼリーを探している。

アサ (棚を両手で開けながら) あれ、もうゼリーなくなった？

ノボル 体を横に曲げて仕事先で挨拶する運動

仕事中。お辞儀などしている。

アサ (頭を左右に下げて) いらっしやいませー、ありがとうございましたー。

ノボル 体を前後に曲げ品出しする運動

と、再び仕事中。物を拾う、在庫を探す、とか。

アサ あ、落としましたよー。そちらの商品はあちらに……ありがとうございましたー。

ノボル 体をねじって休憩する運動

休憩。腰を回して、

アサ やっと休憩、なんか今日お客さん多くないっすか。

ノボル 腕を上下に伸ばし接客する運動

三度仕事中。接客中である。

アサ (腕を上げながら) あ、肩が、ここから、上がらない。薬？あるかな、店長ー！

ノボル 体を斜め下に曲げ退勤する運動

と、仕事が終わる

アサ お疲れ様でしたー。あー、疲れた。あ、靴紐。(しゃがんで結ぶ) ただいまー。

ノボル 体を回して一緒に遊ぶ運動

家に帰ってきて、ノボルと戯れている。

アサ 今日元気いいねえ、ちょっとまって、ぐるぐる追いかけて(痛っ)足の指をタンスの角にぶつけた(

5・寝起する毎日

ノボル 両足で飛ぶ運動

棚にぶつけた足を痛がっている。

アサ つつつつつつつ、ふーふーふーふー、ごめん、今日はもう寝るね。(どノボルを虫かごに戻す)

ノボル 腕を振って寝る準備の運動

歯磨き、洗顔など、寝る支度。

アサ (再び腕を横に振り歯を磨く。そして) おやすみー。

ノボル 深呼吸

眠りにつく。

アサ (寝息) ……………。

と、音楽が終わわり、ノボルが睨りだす。

ノボル 明日は、何する？

アサ ノボル…………。

ノボル 明日は…………。前に行った、公園まで散歩してみようか。

アサ そう言って、あの日も一緒に眠った。

ノボル おやすみ、アサちゃん。

そうして、夜が澄けていく。

5・寝起する毎朝

別の日。

そこには、ヒカリがいない。

アサの部屋。

ヒカリ (深呼吸して) デトックス。

アサ ごめん、何もない。

ヒカリ あ、もう、お構いなく。

アサ あ、ゼリーならあるよ。

ヒカリ いえいえ、本当に。空気が美味しいので。

アサ どうも。

ヒカリ 今日お仕事おやすみなんですか。

アサ うん。休みにしてもらった。

ヒカリ え、大丈夫ですか。

アサ うん。ちょっと体が愈くって。それに……(虫かごに目をやる。)

ヒカリ もしかして、お兄ちゃん。

アサ (うなづく)

ヒカリ どうしたんですか。

アサ もう、そういう時期なの。なんていうか。寒くなってきたし。

ヒカリ ああ……。

アサ 最近エサもあんまり食べなくなってきたし。元気がなくて。あ、だからゼリーも大量に余ってさ。

ヒカリ やっぱりそのゼリーですよ。

アサ うん。

ヒカリ そうでしたか……。大変なときにすみません。

アサ ううん。むしろ、心強い。寂しくなっちゃうから。

ヒカリ ゆっくり深呼吸しましょ。

アサ え。

ヒカリ いいから。ほら。

二人、深呼吸。

ヒカリ デートックス。

アサ ありがとう。

ヒカリ 落ち着きましたか。

アサ うん。なんか、この時期になると思い出しちゃって。

ヒカリ ああ……。あの、一つ聞いてもいいですか。

アサ うん。

ヒカリ お兄ちゃんのどこが好きなんですか。

アサ うーん。どこが好きだったんだろう。

ヒカリ 最初、全然わかんなくて。お兄ちゃんのどこが好きなんだろう、みたいな。ちょっとヤバイじゃないですか。お兄ちゃん。

アサ 最初にカブトムシに生まれ変わりたいって言われたときはびっくりした。

ヒカリ それもそうだし、なんていうか、甘えん坊っていうか。悪くいうと依存体質。アサさんに負担とかかけてないかなって、ずっと思ってた。

アサ そんなことないよ。大丈夫だって。

ヒカリ なら、いいんですけど。

アサ まあ、確かに。幼虫時代はちょっとキモくて敵しいんだけど。ノボルくんのためだから。
ヒカリ 無理しなくていいんですよ。

アサ ううん。大丈夫。そろそろ第四世代の準備しないとなあ。「ノボルくんネオ」。
ヒカリ 無理してません？

アサ ううん。大丈夫。大丈夫。

ヒカリ ……あの、お兄ちゃんが生まれ変わったっての、別に否定しませんが、やっぱり人間の
と、カプトムシの人は、暮らす世界が違ふと思うんです。だから、本当に、無理しない方が
いいっていうか。

アサ でも、ノボルくんだよ。

ヒカリ そうですけど、お兄ちゃんも死んだら死んだで自分一人で生きていけって感じで、あ、言い方
変ですけど、だって、ずっと、一人で生きてるはずじゃないですか。そりゃ、誰かに頼れる時
は頼るけど、ずっと、生まれてから死ぬまで面倒見てくれるのは、本当は自分一人だけなはず
で、だから、

と、アサは大きくあへびをすすめる。

アサ ああ、ごめん、ちょっと。

ヒカリ あ、すみません、変なこと言っただけ。

アサ ああ、いや、本当に、大丈夫だから。

ヒカリ やっぱ、顔色悪いですよ、体だるいって、

と、いびきからいびき無くノボルが現れる。その姿はヒカリには見えていないようだ。

ノボル あさちゃんん。

アサ ううん、本当に、大したことなくて、

ヒカリ 病院とか、連れて行きましょうか。

ノボル アサちゃん、そろそろ、寝る時間だよ。

アサ ううん、本当に、大丈夫、だから。

ノボル 一緒に、寝ようよ、布団、しいといたよ。寝てる間は何も飲んだり食べたりできないから、そ
のつもりで。でも、寝てるだけだから。大丈夫。

アサ ノボル……？

ヒカリ え？

アサ　ごめん、やっぱり、ちょっと、眠いわ。

と、アサは倒れ始めるように眠る。

ヒカリ　アサさん？アサさん？……どうしよう。

6・サナギ

そこは、どうもないう場所。

アサ　ノボル？おい。ノボルー。

ノボル　一緒に寝ようよ。アサちゃん。

アサ　太陽がまだ出てる。

ノボル　僕たちは、昼間に眠るんだ。

アサ　ううん、眠るのは太陽が沈むときだよ。

ノボル　そうだった、けど、僕たちは変わったんだ。

アサ　僕……たち？

ノボル　そうだよ、一緒にかわるう。

アサ　あれ、体が、ドロドロに、なってきたなあ。

ノボル　生まれ変わっても一緒にいようよ。

アサ　ノボルくん？

ノボル　大丈夫、眠っているだけだから。

と、アサの腕の中で、アサは目を閉じた。

ソヨギ　アサちゃん、アサちゃん。

ヒカリ　全然起こしても起きなくて。急に倒れたから、ちよっともう分かんなくて。

ソヨギ　ん……。硬くなってきた。

ヒカリ　え。

ソヨギ　アサちゃん。

ヒカリは、アサを触る。

ヒカリ　ほんとだ。これ……。

ソヨギ　何。

ヒカリ　サナギみたい。

再び、同じでもなら場所。

ノボル 約束したから、絶対、生まれ変わっても見つけるって。
アサ 絶対。
ノボル そう、だから、見つけにきた。
アサ そっか……。
ノボル ごめんね、突然いなくなっちゃって。
アサ 本当だよ。
ノボル こんなはずじゃなかったんだけど。
アサ ごめんね。私が隣にいたのに、苦しかったよね。
ノボル うん、びっくりした。

アサの部屋。

ソヨギ サナギって、あの、サナギ？
ヒカリ はい。もしかしたら、アサさん、カブトムシになるうとしてるんじゃないですかね。
ソヨギ 人間がカブトムシになれるわけないだろ！
ヒカリ 人間がサナギになってるんだから、わからないでしょ！
ソヨギ どうしたら、サナギって目覚めるの。
ヒカリ 変体が完了するまでは……。
ソヨギ アサちゃん！アサちゃん！（と、アサを揺らす）
ヒカリ ソヨギさん！サナギを揺らしたらダメです！
ソヨギ なんで！
ヒカリ サナギは静かにさせなきゃ、うまく変体できなくて死んじゃうんです！
ソヨギ うまく変体したら人間じゃなくなるだろ！
ヒカリ だって！
ソヨギ じゃあ、えっと……。

ソヨギもアサ隣に横たわる。

ソヨギ ……。
ヒカリ 何してるんですか！
ソヨギ おれもサナギになる。
ヒカリ はあ？？

と、再びアサとノボル。どこでもない場所。

ノボル さあ、ゆっくり、眠ろう。
アサ 眠る？
ノボル そうだよ、サナギの間は、ゆっくり眠るんだ。ほら、いっしょに。
アサ ……怖い。
ノボル 大丈夫だよ。少しの辛抱だから。ほら。
アサ 私、カブトムシになりたくない。
ノボル なにも、辛いことなんかないんだ。おいで。
アサ いやだ。
ノボル アサちゃん？約束したよね。
アサ 約束したけど……。

アサの部屋。

ヒカリ いや、ソヨギさんがサナギになったところで、アサさんを起こせるわけじゃないし、ねえ、ソヨギさん、もう救急車とか呼んで。

と、ソヨギを揺らすのが、その感触がおかしい。彼もまた「サナギ」になってしまった。

ヒカリ え……？えええー？？

7・生きた心地

と、どこでもない場所。

ノボル 大丈夫だって、本当に。なんにも痛いことなんてないし、眠ってればいいだけなんだ。本当だよ。

と、そこへソヨギが目覚め、二人の会話に加わる。

ソヨギ うがあ！
アサ ソヨギくん？
ソヨギ アサちゃん、よかった、また会えた、本当によかった。
ノボル ソヨギ。
ソヨギ ノボル！

ノボル おお、久しぶりー！お前も一緒に、カブトムシになる？

ソヨギ ばかーばかーばかーならないしーなれないーお前は、もう死んだんだよ。そっとしておいてくれよ。

ノボル なるるよ。カブトムシ。大丈夫。アサちゃんも、これからカブトムシになるんだ。

ソヨギ ならないーお前、どうしちやっただよ。

ノボル どうしちやっただよって、そっちこそ、なんで僕たちのことに口を出すんだよ。

ソヨギ それは……。

ノボル 関係ないだろ？

ソヨギ おれが、アサちゃんのことを……あれだから。

ノボル あれ？

ソヨギ あれだよ、あれ！

ノボル だめだよ、アサちゃんはぼくのものなんだ。

ソヨギ ちがうーアサちゃんは、アサちゃんだよ。だれのものでもないーだから、アサちゃんを開放してあげよう。

ノボル そんなことないー……わかった、ここはカブトムシらしく、相撲で決めよう。

アサ ノボル？

ソヨギ ……受けて立つ！

アサ ソヨギくん？ちょっと、やめようよ、そういうの、ノボルあんた勝てるわけじゃないでしょ、体格的に。

ノボル 関係ない！

ソヨギ いくぞ、ノボル！

ノボル よしこい！

と、ノボルとソヨギは相撲をとる。しかし、あっさりと負けるノボル。

再び、挑むノボル。しかし、やはり負ける。

三度挑む。

ノボル (取り組みながら) 僕には……まだ……たくさん伝えたいことがあるんだー朝淹れてくれる

コーヒーが美味しいこと、記念日を忘れてはめんどってこと、朝起こしてくれてありがとうって

こと……！

ソヨギ ……！

ノボル 目を瞑ったまっげが可愛いこと、起きたときにおはようって言うこと……！

ソヨギ ノボル、ごめん……！

と、やはりノボルは負け、倒れる。ノボルは疲れて立ち上がれない。

ソヨギ 帰ろう、アサちゃん。

アサ ……。

ソヨギ アサちゃん？

アサ ばか！なんで、負けんの。

ノボル ……。

アサ なんで、いなくなるの。

ノボル ごめん。

アサ 朝目が覚めると、あなたの体は抜け殻になって、揺すっても揺すっても、目を覚ましてくれなかった。

ノボル うん。

アサ 毎日眠って毎日目覚めて、歯を磨いて洗濯物を干して。仕事に行って帰ってきて。あなたと一緒にそうやって過ごして。それが当然だったのに。

ノボル そうだね。

アサ 昨日までの当たり前の毎日がずっと続くんだった、そう思ってたんだよ。明日も明後日も、隣で目覚めて、隣で眠って、そういう毎日がずっと続くと思ってたんだよ。明日もきつといいことがあるって思いながら眠ってたんだよ。それが当たり前だったんだよ。

ノボル うん。

アサ 明日もしかしたら、事故に遭つかもしれない、もしかしたら災害が起こるかもしれない。そんなふうにいるながら私たちは生きていけなくちゃいけないの？当たり前の幸せに包まれて眠っていたいの。

ノボル 僕も気づかなかったよ。すぐ隣に想像もしなかった明日があること。アサちゃん、僕はきみが好きだった。好きだったって、思ってたのこれっぽっちも伝えられなかった。伝えられなかった言葉は、あの日を境に腐って、土に帰っていくんだ。誰にも言わなかった言の葉は腐って、まるで腐葉土のように、そして、誰かが食べて、大きくなって、そうして生まれ変わるんだ。いっしょに、そうなりたいって、思ってしまったんだ。ごめんね。ぼく負けちゃった。

アサ、ノボルの隣にいた日々。

ノボル だめだよ。アサちゃん。明日も目覚められた幸せに包まれながら、新しい朝を噛み締めるんだ。最後に、お別れが言えてよかった。本当は、それだけでよかった。ごめんね。

アサ ノボル。

ノボル ソヨギ、ありがとう。ゆるしく。

ソヨギ うん。

ノボル 新しい、アサちゃん、おはよう。

アサ ノボル、おやすみ。眠っているうちに、体の中のいろんなものが全部溶け出して、嬉しいことも、悲しいことも、全部びちゃ混ぜになっちゃって、全身に行き渡って、そうして、新し

いアサを迎えるの。寝て起きて、寝て起きて、同じサイクルの中で、新しい朝には、新しい私、ネオ私になって、明日を迎える。明日はきつといい日になる。明日はきつと、いい日になる。そして、おやすみ、きのうの私！

そうして、ノボルは消えた。

おわり